
ずっと、このままでよ

光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ずっと、このままだよ

【Zコード】

Z0110Z

【作者名】

光

【あらすじ】

常磐亜紗美は、元気の良い活発な2歳の女の子。

ある日、クラスに男子生徒が転校して来た、彼の名は時田光孝と言つ。

光孝は、頭が良くスポーツ万能なので、女子の中で告白する子もいたが。

「好きな子がいるから」と全員、断られた。
はたして、光孝の好きな子は・・・?

? クラスに

朝7時。

イ。

田覚まし時計が鳴つて、亜紗美は田を覚まし部屋を出で、洗面所で顔を洗いリビング行き母親。

「おはよ！」

「おはよう！」

挨拶を交わし、座り朝食を食べて部屋でワンドルを背負い。

「いつてきま　す」

家を出で、学校に向かい歩いていると肩を叩かれ、振り向くとクラスメイトの石橋麗子が立つていて。

「おはよー、亜紗美」

「おはよー、麗ちゃん」

挨拶を交わし、学校に向かって歩いてくる。

「ねえ、今日、転校生が来るの、知ってる？」

「知らない、なんで麗ちゃんが知ってるの？」

聞くと。

「昨日、職員室に行つた時、ボードに書いてあつたんの」

「ふうん、そうなんだ」

校門を潜り、教室に行きクラスメイトとしゃべつてくる。

キンゴーンカンゴーン、キンゴーンカンゴーン。

チャイムがなり、担任が入つて来て出席簿を教壇に置き。

「今日は、転校生が来ているので紹介します」

すると、生徒たちが騒ぎ始め出すと。

「静かにして下さい」

怒ると、生徒たちが静かになり廊下に向かつて。

「じゃ、入つて来て下さい」

1人の茶髪の男子生徒が入って来て教壇に立つと、担任がホワイ

トボードにその男子生徒の名を書いた、時田光孝と。

「時田くんは、お父さんの仕事の関係でこの町に引っ越しして来ました、まだ、わからない事があると知れませんので、聞かれたら教えてあげて下さいね」

「はーい」

返事をすると。

「じゃ、時田くん、一言お願いします」

光孝の肩をポンと叩くと。

「初めまして、時田光孝です、よろしくお願いします」

頭を下げる、担任が。

「常磐さん」

「はー」

返事をすると。

「あの子の隣に座つてくれるかな?」

「はー」

返事をして、与えられた席に行き隣に座つている亞紗美に。

「よろしくね」

「ひちらこそ」

席に座ると、出席を取つて授業を始めた。

放課後。

亞紗美がランドセルの中に授業道具を入れていると、麗子が来て。

「亞紗美、帰る?」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩きながら

「ねえ」

「うん、何?」

「時田くんつて、結構イケてるよね?」

「そうかな?」

首をかしげると。

「私、ああいう男の子、タイプなんだ」
浮かれながら言い、麗子の家の前で。

「じゃあね」

「うん、バイバイ」

別れ、家に帰った。

? キュン

光孝が転校して来て、5日が過ぎた。

頭も良く、スポーツ万能な光孝はクラスの人気者なっていた。

「いってきま　す」

家を出て、学校に向かい歩き校門の前で、麗子に逢い。

「おはよー、亜紗美」

「おはよう、麗ちゃん」

挨拶を交わし、校門をくぐり教室に行き担任が来るのを待つていると、チャイムがなり担任が来て出席を取り算数の授業を始め、問題を書き。

「じゃ、ここの問題を時田くん解いてくれないかな?」

「はい」

席を立ち、ボードに書いてある問題を解き始め全問解くと。
「皆さ　ん、合ってますか　あ?」

「合つてま　す」

一斉に言つと。

「ありがとう、戻つていいですよ」

席に戻ると、授業を続けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると、麗子が来て。

「亜紗美、帰る?」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き麗子の家の前で。

「宿題、やろ?」

「うん、いいよ」

別れ、家に帰つて宿題の教科書と筆記道具を手提げに入れて、キ

ツチンに行き。

「麗ちゃん家で、宿題して来るね」

家を出て、自転車に乗つて麗子の家に向かつた。

家に着き、自転車を降りてドアチャイムを押すと、麗子が顔を出し。

「どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、部屋に入ると小せいテーブルが出ていて座り、宿題を始めた時間後。

「終わった」

ノートを閉じて、亜紗美が手提げにしまつていると。

「ジュース、持つてくるね」

部屋を出て行き、本棚からマンガ本を出して見ているとジュースとお菓子を持つて入つて来て、グラスに注ぎ田の前に置くと。

「ありがとう」

見ながら飲み、全部見終り立ち上がり。

「帰るね、バイバイ」

麗子の家を出て、自転車乗つて帰る途中で、キヨロキヨロしてい る光孝が見え。

(どうしたんだらう?)

光孝の元に行き。

「どうしたの?」

「あつ! 常磐さん、文房具店つてどこにあるか教えて?」

「いいよ」

文房具店に向かつた。

文房具店に着き、自転車を降り店内に入り2人は、ノートが置いてある場所に行き1ずつノートを持ち亜紗美はシャープペンの替え芯を持つて、レジで支払いをして店を出て自転車に乗るうとした時、

笑みを浮べ。

「ありがとう、助かったよ」

礼を言われた時、小さな胸がキュンと締め付けられる感じがした。

(何、この感じ?)

胸を押さえていると、心配そつた声で。

「だ・大丈夫?」

「何でもないから、じゃあ、明日」

別れ、家に帰りながら。

「あれって、何だったんだろ? まついいか」

? 勘違い

5日が経つた。

亜紗美は文房具店の事以来、光孝を見ると胸が締め付けられる感じは続けていた。

「いつてきま　す」

家を出て、学校に向かい歩き校門の前で、麗子に逢い。

「おはよう、亜紗美」

「おはよう、麗ちゃん」

挨拶を交わし、校庭を歩きながら。

「昨日のお笑い、見た？」

「うん、見たよ、面白かったね」

話しながら歩いていると、背後で。

「おはよう」

光孝の声がし、2人は振り向き。

「おはよう、時田くん」

麗子は挨拶したが、亜紗美は胸が締め付けられる感じがし。

「麗ちゃん、行こう」

「う・うん」

教室に行き、授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると、麗子が来て。

「亜紗美、帰ろう?」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き麗子の家の前で。

「じゃあね」

「うん、ハイバイ」

別れ、家に帰り宿題をしてベッドで雑誌を見ながら。

(他の男子を見ても平気なのに、なんで、時田くんを見ると胸が締め付けられるんだろう？)

考えながらページを捲つていると、「お悩みコーナー」と書いつページで目が留まつた、そこには「1人の男の子を見ると、何も話す事が出来ない、どうすれば話せるように慣れますが、教えて下さい？」と書いてあって。

「私と、似てる？」

言い、アドバイス文を読むと。

「大丈夫と思い、大きく深呼吸して話し掛けてみれば、必ずうまく行くよ」と書いてあり。

「ふうん、やってみよう」

雑誌を閉じて、部屋を出た。

次の日。

「いつでもね、す」

家を出て、学校に向かい歩き校門の所で光孝の姿が見え、昨日の雑誌のフレーズを思い出し、深呼吸をして。

「よしぃーー！」

光孝に話しかけようとした時、背後で。

「おはよう、亜紗美」

振り向く。

「おはよう、麗ちゃん」

挨拶を交わしていると、

「おはよう」

「おはよう、時田くん」

教室に向かいながら。

「もう、学校に慣れた？」

「うん、少しね」

話している姿を見て。

(いいなあ 楽しそう)
教室に行き、授業を受けた。

放課後。

光孝の前にクラスメイトの長谷川奈美が立ち。

「時田くん、ちょっとといこかな?」

「うん」

教室を出て行くと、麗子が来て。

「亞紗美、帰る?」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩きながら。

「亞紗美つてわあ」

「うん、何?」

「時田くんの事、避けているの?」

「別に、避けていないよ、何で?」

「だつて、時田くんが来ると黙つちやつから、そつかなあて思つて
さあ」

「べ・別に、そんなんじやないから」

(時田くんを見ると、胸が締め付けられる感じがするんだもん)
下を向いて答えると。

「い・ごめん、私の勘違いだつたみたい、本当にごめんね」

「ううん、いこよ」

笑みを浮かべ、麗子の家の前で。

「じゃあね」

「うん、バイバイ」

別れ、家に帰る道を歩いていると隣に光孝が来て。

「常磐さん」

「あつ! 時田くん」

「常磐さんの家つて、いの辺なの?」

「うん、時田くんの家も？」

「うん」

頷き。

「一緒に帰る? うん、

「う・うん、いいよ」

しゃべりながら帰り道を歩いていると、今まで締め付けられていた感じは消え、胸が温かくなるを感じ西紗美の家の前で。

「私ん家、ここなんだ」

「ふうん、僕ん家とそんなに離れていないんだね、じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入つて部屋で宿題を始めた。

？ 告白された

光孝とじやべる様になつて5日が過ぎた。

「いつきま　す」

家を出て、学校に向かつて歩き校門を潜り校庭を歩いていると、隣に光孝が来て。

「おはよー、常盤さん」

「おはよー、時田くん」

挨拶を交わし、教室に向かつて歩いていると麗子に逢い。

「おはよー、麗ちゃん」

「おはよー、亜紗美に時田くん」

教室に入り、授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると、麗子が来て。

「時田くん、ちょっとといいかな？」

「うん、何？」

「ここじゃ、ちょっと」

「わかった」

教室を出て行き、亜紗美は帰ろうとしたが2人か気になり探しに行き、校舎の裏で2人を見つけ、物陰に隠れ会話を聞いた。

「ごめん、僕には好きな子がいるから石橋さんは付き合えないよ、

ごめんね」

「ううん、こちこちそ呼び出しあつて」

麗子に見つからない内に教室に戻り、ランドセルを背負うと麗子が元気なさそうに戻つて来た、それもそのはずだ、告白した人にふられたのだから。

「麗ちゃん、先に帰るね、じゃあ

「うん」

学校を出て、家に帰り部屋で宿題をしながら。

(時田くんの好きな子って、誰なのかな?)

考えた。

光孝の好きな子はわからないまま、数日が過ぎた。

校門を潜り校庭を歩いていると、隣に光孝が来て。

「おはよう、常磐さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、歩きながら。

「時田くんって、お笑いとか好き?」

「うん、好きだよ、 の神様とか毎週見てるよ」

「私も見てる、あれ面白いよね」

教室に行き、授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れている。

「ねえ、常磐さん」

「うん、何?」

「話があるんだけど、いいかな?」

「いいよ、何?」

「ここじゃ、だから場所変えていい?」

教室を出て、校舎の裏で光孝は顔を赤くして。

「好きです、僕と付き合つてください」

いきなりの告白に。

「えっ!」

驚いた、なんと光孝の好きな子は亞紗美だったのだ。

「いいよ、付き合つても」

「本当?」

「うん、みんなしくね

「こ・こちあいじーか

教室に戻り、ランドセルを背負い学校を出て、帰り道を歩き田舎
美の家の前で。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ

別れ、中に入つて部屋で宿題を始めた。

? 初デート

2人が付き合い始め、初めての金曜日。

家を出て、学校に向かって歩き校門の前で、光孝に逢い。

「おはよー、常盤さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、教室で授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると。

「常盤さん、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き畠紗美の家の前で。

「ねえ、常盤さん」

「うん、何？」

「明日、映画を観に行こうよ？」

「いいよ」

(これって、デートの誘い)

「じゃ、?時に迎い来るから」

「うん、待ってるから、バイバイ」

別れ、中に入つて部屋で宿題を始めた。

次の日。

9時に起き、洗面所で顔を洗いリビングに行き母親に。

「おはよう」

挨拶をすると、驚きながら。

「どうしたの？ 休みの日はお直過ぎまで寝ているのに？」

「?時に友達と映画を観に行くの、だから、ご飯」

朝食を全部食べて、光孝を待つていて。

ピンポーン。

ドアチャイムが聞こえ、玄関に行きドアを開けると光孝が立つて

いて。

「おはよう、行こうか？」

「うん」

家を出て、自転車に乗り映画館に向かった。

映画館に着き、自転車を降りて入場口で半券と料金を払い、館内に入つてスクリーンから？列目に座りベルが鳴ると、徐々に暗くなりスクリーンに映像が映し出された、2人が観ている映画は週刊マンガ雑誌で人気のマンガのアニメ映画で、原作者が映画のために書き下ろした作品で2人は真剣に観て2時間後、映画は終わり館外に出て。

「眩しい」

手を目の上にかざしていると。

「おはよ、ファミレスでいい？」

「うん」

自転車に乗り、ファミレスに向かつた。

ファミレスに着き、自転車を降り店内に入りキヨロキヨロしていふと、ウエイトレスが来て。

「いらっしゃいませ、何名様でしょうか？」

「2人です」

答えると、空いている席に案内してくれ2人が座ると。

「お決まりになりましたら、お呼び下さい」

一礼をして去つて行き、2人はメニューを見て選び始めて数分後。

「決ました？」

「うん」

テーブルの隅に置いてあるブザーを押すと、ウエイトレスが来て。

「お決まりでしょつか？」

オーダーを取る準備をすると。

「常盤さんから、どうぞ」

「じゃあ、私はハンバーグセットのライスと、オレンジジュースで
「僕も、ハンバーグセットのライスとコーラで、お願ひします」

オーダーを取ると。

「少々、お待ち下さい」

一礼して去つて行き数十分後、料理が運ばれて来て皿の前に置かれ。

「以上で、注文はよろしくでしょうか？」

「はい」

「じゅつくり、どうぞ」

一礼をして去つて行き。

「いただきます」

食べ始め、全部食べ食休みをして。

「出よみうか？」

「うん」

レジで支払いをして店を出て、自転車に乗り畠紗美の家の前で。

「今日は、楽しかったよ」

「喜んでもらえて嬉しいよ、じゃあ

「うん、バイバイ」

別れ、中に入った。

?

図書館での勉強

1学期最後の日。

「いつきま　す」

家を出て、学校に向かつて歩き校門を潜り校庭を歩いていると、

隣に光孝が来て。

「おはよつ、常磐さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、教室に行き授業を受けた。

放課後。

担任がクラフト封筒を持っては入って来て。

「では、通知表を渡しますので、呼ばれたら取りに来て下さー」

生徒の名を呼び始め、生徒全員に渡すと。

「明日から夏休みです、交通事故等には気をつけて、登校日に笑顔で逢いましょう、では田直さん」

「規律」

号令をかけると、生徒たちは立ち上がり。

「礼」

頭を下げ、担任が出て行くと。

「常磐さん、帰ろうよ?」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き亜佐美の家の前で。

「常磐さん」

「うん、何?」

「明日から、一緒に勉強しない?」

「うん、いいよ」

「じゃあ、9時に迎えに来るよ」

「うん、わかった、バイバイ」

別れ、中に入りリビングに行き母親に。

「ただいま あ」

「おかえり」

ランドセルの中から、通知表を出し。

「はい」

渡すと、受け取り見て。

「よく、頑張りました」

頭を撫でて。

「じゃあ、夕飯は大好きなカーフクリームコロッケにしましょっ

「わ い、やつた」

部屋に行き、荷物を整理した。

次の日。

8時に起き、洗面所で顔を洗いリビングに行き母親に。

「おはよう」

「おはよう、朝飯はどうするの?」

「パン」

答えると、キッチンで料理を作りテーブルに置かれると、食べ始め全部食べテレビを見ていると。

ピンポーン。

ドアチャイムの音が聞こえ、玄関に行きドアを開けると光孝が立つていて。

「おはよう、行こうか?」

「うん」

外に出て、自転車に乗つて図書館に向かった。

図書館に着き、自転車から降りて館内に入ると冷房が効いていて、2人は向かい合いに座り。

「じゃあ、5ページしよう?」

「うん」

テキストを開いて記入を始め、3ページが終わると。

「ちょっと、休憩しようか?」

「うん」

席を立ち、自動販売機にお金を入れ。

「何、飲む?」

「じゃあ、これ」

ストロベリーミルクのボタンを押し取り出すと、光孝はノーヒのボタンを押しベンチに座り飲んで。

「そろそろ、始めようか?」

「うん」

戻つて、残りのページをして5ページが終わり片付けをし、図書館から出で。

「お皿、ハンバーガーでいい?」

「うん」

バーガーショップに向かつた。

バーガーショップに着き、自転車を降りて店内に入りカウンターに立つと、女性店員が。

「いらっしゃいませ、こちらでお召し上がりでしょうか?」

「はい」

答え。

「常磐さんから、どうぞ」

「私は、チーズとオレンジのMとポテトのSで」

「僕は、照り焼きとポテトのMとコーラのMで」

注文し食材をトレイに載せてもらひつと、支払いをして空いている席に座り食べ、全部食べて。

「出ようか?」

「うん」

トレイを戻して店を出て、自転車に乗り畠紗美の家の前で。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入った。

？ 花火大会

夏休み最後の日。

すでに宿題の終わっている、亜紗美はテレビを見ていると電話がなり、母親が出て。

「常磐です、ちょっと待つてね」

受話器を置き、亜紗美の所に来て。

「麗ちゃんから、電話よ」

「はい」

テレビを消し、電話に出た。

「もしもし、何？」

電話は、宿題を写させてと囁つ内容で。

「いいよ、今から行くね」

電話を切り、部屋に行きテキストを手提げに入れ家を出て、自転車に乗り麗子の家に向かった。

家に着き、自転車を降りドアチャイムを押すと、麗子が顔を出し。

「いらっしゃい、どうぞ」

「おじゃします」

上がり、部屋に入ると手提げからテキストを出して。

「はい」

「ありがとうございます、本でも見てて」

受け取り、テキストを写し始め、亜紗美は本棚からマンガ本を出し見始め数十分後。

「終わった」

両方のテキストを閉じて、亜紗美に返し。

「ジュース、持つて来るね」

部屋を出て行き数分後、ジュースを持って来てグラスに注ぎ、亜

紗美に。

「はい」

「ありがとう」

飲みながら見ていると。

「ねえ、夜、花火を観に行こいつよ?」

「うん、いいよ」

「7時に集合ね」

「うん、わかった、じゃあ」

麗子の家を出て、家に帰る途中で光孝に逢い。

「ねえ、時田くん、夜、花火を観に行ける?」

「うん、行けるよ

「じゃあ、7時に家に来てよ」

「うん、わかつた」

別れ、家に帰り中に入つてリビングに行き。

「ただいま あ」

「おかえり」

「ご飯は、何?」

「野菜炒めでいい?」

「うん」

座ると、キッチンに行き夕飯を作りテーブルに置くと。

「いただきます」

全部食べ、光孝を待つていると。

ピンポーン。

ドアチャイムが聞こえ、玄関に行きドアを開けると光孝が立つていて。

「おまちどう」

「行こう」

外に出て、自転車に乗り麗子の家に向かつた。

家の前に行くと、麗子とクラスメイトの加藤香織と坂本和美が待

つていて。

「おまちどう」

5人は、花火大会が開かれる会場に向かつた。

会場に着くと、すでに大勢の観客が集まつていて屋台でかき氷を買い、一番觀える場所に座り数分後、最初の花火が夜空に音を立てながら打ち上がり、大きな音と共に夜空に花を開くと拍手がわき5人も拍手していると、次々に打ち上げられ最後の？連発の花火が終わると観客たちは帰つて行き、自転車に乗つて来た道を戻り麗子の家の前で。

「じゃあね」

「うん、明日ね」

それぞれの家に帰つて行き、亜紗美は光孝と帰り道を自転車を転がし、亜紗美の家の前で。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入つてリビングに行き母親に。

「ただいま　あ」

「おかえり」

冷蔵庫からジュースを出し飲み、部屋に行き下着をバスルームに向かつた。

? ジョギング

2学期に入り、周りの木々が紅葉し始めた?月。

4時間目 の 体育 の 時間。

準備体操をして、担任の来るのを座つて待つていると、職員室から出て来て生徒たちの前に来て。

「今日の体育の時間は、?周のタイムを計ります」

「え　　え、やだ　　あ」

声がわいたが、担任は女子たちに鉛筆と紙を渡すと。
「では、男子から始めますのでスタートラインに立つて下さい」
スタートラインに立つと。

「ヨーイ、ハイ」

掛け声と共に走り出し、担任の前を通るとタイムを言いそれをパートナーの女子が紙に書いて行つた、光孝が一番でゴールすると畠紗美はタイムが書いてある紙を持って、光孝の所に行き。

「はい」

紙を差し出すと、受け取り見て。

「タイム、落ちちゃつたなあ

残念がつて いると。

「続いて、女子　　い」

担任の声が響き、女子たちがスタートラインに立つと。

「ヨーイ、ハイ」

男子と同様に走り出して、ゴールをすると男子たちは紙を渡し、担任の元に集まると。

「今度からの体育の時間は、?周のタイムを計ります、じゃあ、教室に戻つて給食にしましょう」

教室に戻り、給食を食べて残りの授業を受けた。

放課後。

「常盤さん、帰らひつよ?」

「うそ」

学校を出て、帰り道をタイムが書いてある紙を見ながら。

「もつと、早く走れるようになりたいなーあ

歩き、亜紗美の家の前で。

「ねえ、明日からジヨギングしない?」

「うん、いいよ」

「じゃあ、6時に迎えに来るから」

「うん、わかつた、バイバイ」

別れ、中に入つてリビングに行き母親に。

「ただいまーあ

「おかえり」

そのまま、早めにベッドに入った。

5時半に田覚まし時計が鳴つて起きて、洗面所で顔を洗いリビングに行き母親に。

「おはよう

「どうしたの、こんなに早く?」

「今日から、リレーの練習で6時に友達が迎えに来るの」

光孝を待つていると。

ピンポーン。

ドアチャイムの音が聞こえ、玄関に行きドアを開けると光孝が立つていて。

「おはよつ、行ひつか?」

「うそ」

家を出ると。

「家と学校を往復、6回しつ

「うん」

軽い準備体操をして、ジョギングを始め6回の往復が終わると
人とも息が上がつていい。

「ハアハアハア、じゃあ

「うん、学校でね」

別れ、中に入りキッチンに行き母親に。

「た・ただいま」

「おかげり、ご飯は？」

「シャワー浴びてからにする」

下着を持って、シャワーで汗を流して着替え、朝食を食べ。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かった。

そして、ジョギングを始めて5日が経った体育の時間。

「ヨーイ、ハイ」

掛け声と共に走り出し、タイムを読み上げ書き込んで行くと、ま

たしても光孝が1番でゴールをして光孝に紙を渡す。

「やつたーあ、1分タイムが縮んだ」

喜んでから。

「常磐さんも、ガンバって」

「うん」

スタートラインに立つと。

「ヨーイ、ハイ」

一斉に走り出し、ゴールをすると男子が紙を渡して行き、亜紗美
がゴールをすると光孝が駆け寄り。

「この前より、タイムが縮んだよ

紙を受け取り見ると、2分もタイムが縮んでいて。

「やつた あ

喜んでいると、チャイムが鳴り教室に戻つて給食を食べて、残り

の授業を受けた。

? 運動会

今日は、小学校での最後の運動会。

「いつてきま す」

家を出で、学校に向かつて歩き校門の前で、光孝に逢い。

「おはよづ、常盤さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、教室に行くと女子たちが一箇所に集まつていて。

「どうしたんだろう?」「

輪の中に入つて行くと、そこには足に包帯を巻いた麗子が痛々しそうに座つていて。

「どうしたの、その足?」

「昨日、弟と遊んでいたらガラスで斬つちやつたんだ、楽しみにいるとしてたのになーあ」

残念そうに話していると、女子たちが。

「どうする、麗子の代わり?」「

話していると。

「私が、麗ちゃんの分も走るよ」

「本当?」

「うん」

返事をすると。

「じゃあ、頼むね」

走者表の麗子の所に亞紗美の名が書かれると、担任が教室に来て

出席を取ると。

「外に出て下せー」

担任の指示に従い外に出て並び、開会式が終わると運動会が始ま
り1年生を残して、昨日出して置いた席に座り、1年生の短距離走
を見て数十分後、6年生の短距離の番になり席を立ち場所に行き、
第1走者がスタートラインに立つとスタートーの教師がピストルを

鳴らすと一斉に走り出し、ゴールをすると次々に走つて行き光孝の番になつてピストルの音と共に走り出し、最初は2位を走っていたが最後で抜き1位でゴールをして男子が終わつて、女子の番になり男子と同様に行われ、亜紗美の番になりピストルの音と共に走り出し2位でゴールをして短距離走が終わり、1年生の玉入れと2年生のスプリンターレーを見て教室で軽い食事をして午後の部が始まつた、1年と2年生は午前中だけなので3年生のクラス対抗リレーから始まり数十分後、6年生の対抗リレーの時間になつて校庭の真ん中に行き走る順に並んで座り第1走者にバトンが渡されると、スタートラインに立ちピストルの音と共に走り出した、順位は2組、4組、1組、3組で行われていて亜紗美のクラスは3位を走つていて?走者目で2位になり、アンカーの光孝にバトンが渡ると1位を走つている4組を追いかけて行き、最後の直線で抜いてゴールすると4組の男女は喜んだ。

続いて女子の番になりピストルの音と共に走り出した、順位は3組、4組、2組、1組と最下位を走つていて?走者目で3位になり、亜紗美の1回目の出走の番が来て香織からバトンを受け取ると2位を走つている3組を追いかけて行き第2カーブで抜いて、和美にバトンを渡してトラックの中に入り息を整えていると、女子たちが集まつて来て。

「亜紗美、大丈夫?」

「うん、平気、平気」

言つていると、歓声が聞こえ見ると1組が1位になつていて、亜紗美の2回目の出走の番が来て縁からバトンを受け取り2位と差をひらいてアンカーの妙子にバトンを渡すと独走でゴールした、1組は男女1位と言う好成績で対抗リレーは終わり、閉会式で1組には2枚の賞状とトロフィーが送られ運動会の幕は閉じ、教室に帰り担任を待つていると賞状とトロフィーを持って入つて来て教壇に置き。

「今日はおめでとう、皆でバンザイをしましょ」

生徒たちが立つと、担任が。

「バンザイ、バンザイ」

両手をあげると、生徒も手をあげて拍手をして席に座る。

「では、今日は早く寝て、明後日に元気な姿で逢いましょうね、日直さんお願ひします」

頼むと、日直が。

「起立」

立ち上がると。

「礼」

頭を下げるといふと、担任が出て行く。

「常磐わん、帰ろうつむ？」

「うん」

学校を出で、帰り道を歩き亞紗美の家の前で。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入つてキッチンに行き母親に。

「ただいまーあ」

「おかえり」

「ご飯、出来たら呼んで」

部屋に行き、雑誌を見ていろつむに寝てしまった。

？誕生日

今日は、亜紗美の？回田の誕生日。

「いってきます」

家を出て、学校に向かって歩き校門を潜り校庭を歩いていると、

隣に光孝が来て。

「おはよう、常磐さん」

「おはよう、亜紗美さん」

挨拶を交わし、教室に行き授業を受けた。

放課後。

麗子と香織と和美と縁をバースデーパーティに誘い、ランドセルに授業道具を入れている。

「常磐さん、帰ろうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き亜紗美の家の前で、顔を赤くし。

「時田くん」

「何？」

「今日ね、私の誕生日なの、それでね、夜7時からパーティをするんだけど、来てくれるかな？」

「わかった、7時だね、じゃあ

「待ってるから」

別れ、中に入つてリビングに行き母親に。

「ただいまーあ

「おかえり、夜、何人来るの？」

「5人だよ」

「じゃあ、お料理いっぱい作らないとね？」

「お願ひね

部屋に行き、宿題を始めた。

そして、7時近くになり。

ピンポーン。

ドアチャイムが聞こえ、玄関に行きドアを開けると麗子と香織と和美と縁が立つていて。

「どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、4人が部屋に入ると。

「ジュース、持つて来るね」

キッチンに行き、冷蔵庫を開けジュースのボトルを出している。

「誰か、来たの？」

「麗子ちゃんたち」

答え、人数分のグラスとボトルをお盆に載せて、部屋に行きジュースを注ぎ目の前に置く。

「ありがとう」

4人が飲んでいると、子機があり。

「何？」

出ると、「用意が出来た」と言つ電話で。

「出来たって、行こう？」

「うん」

部屋を出て、客間に行くとテーブルの上には「馳走」が出ていて、真ん中にケーキが置いてあり座ろうとした時。

ピンポーン。

ドアチャイムが聞こえ、玄関に行きドアを開けると光孝が立つていて。

「遅れて、ごめん」

「ううん、いいよ、上がつて」

「おじゃまします」

上がり、一緒に客間に行き。

「時田くん、ここ座つて？」

隣に座らせると、母親がロウソクに火をつけて電気を消し、バー
ステーソングを歌つて火を吹き消すとパーティは始まり、にぎやか
にやり1時間後が経つて麗子たちが。

「私たち、帰るよ」

立つと、亜紗美は玄関まで送り。

「今日は、ありがとう」

「じゃあ、明日ね」

「うん、バイバイ」

別れ、客間に戻りケーキを食べていると。

「常磐さん、僕も帰るよ」

立つと、玄関まで送り靴を履いてポケットから小箱を出し。

「これ、プレゼント」

「ありがとう」

受け取ると。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、片づけを手伝つていると母親が。

「あの、男の子、なんて言う子？」

「時田光孝くん、今年、学校に転校して来たの」

「ふーん 亜紗美は友達がいっぱいだね」

「うん」

片づけて部屋に行き、プレゼントの箱を開けると、中には学校で
流行つているマンガのキャラクターの人形が入つていて飾ると、下
着を持ってバスルームに向かつた。

？修学旅行

？月も終わりに近づき、今日から一泊二日の修学旅行。

「いつきます」

家を出て、学校に向かつて歩き校門の前で、麗子に逢い。

「おはよう、亜紗美」

「おはよう、麗ちゃん」

挨拶を交わし、校門を潜ると生徒たちが集まつていて会流すると、4台のバスが校庭に入つて来ると生徒指導の教師が。「バスに乗る時に、運転手さんとガイドさんにてよりじべお願ひします」と言つてから乗りましょう

「はい」

返事して、運転手とガイドに挨拶をしてバスに乗り込むと、バスは目的地に向かつて走り出した、バスの中ではクイズやしりとりをして賑やかで数時間が経ち、目的地に到着しバスから降りると。

「記念撮影をしますので、1組の皆さん並んで下さい」

所定の場所に横一列に並ぶと、カメラマンがシャッターを切り全クラス撮ると、建造物を見学して。

「では、お昼にします、お昼を食べ終わったら1時間の自由時間になります」

生徒たちは散らばり、お昼を食べてお土産や夜食べるお菓子を買つたりしていると、集合の合図が流れ、バスに乗つて今夜の旅館に向かつた。

旅館に着き、バスから降りて旅館の中に入ると女将さんと従業員さんたちが。

「お待ちしておりました」

出迎えてくれ。

「お世話になりまーす」

頭を下げる、番頭さんが部屋のカギが入ったダンボールを持って来ると。

「各班の班長さん、カギを取りに来て下さい」

班長は前に出て、それぞれ部屋のカギをもらい部屋に散らばつて行き、亜紗美も麗子と香織と和美と縁で部屋に行き、麗子が部屋を開け中に入り荷物を隅に置くと香織が。

「UNO、持ってきたんだ あ、やらない?」

「うん、やる」

UNOを楽しんでいると、戸を叩く音がして麗子が戸を開けると学級委員の町田加奈が麗子に言付けをして去つて行き、戻つて来て。「ご飯だつて、行こづ」

カードを片付け部屋を出て、大食堂に行くとテーブルの上には沢山の郷土料理が出ていて座り食べて、部屋に戻ると人数分の布団が敷いてあって亜紗美は。

「うわ あ、温かそう」

飛び込み「ゴロゴロと転げ、麗子たちもやつていると戸を叩く音がして麗子が戸を開けると、荒井和英と川茂信と井川浩一と笹木俊宏、それに光孝が立つていて。

「遊びに来たぜえ」

5人は、部屋に入つて茂信がグルッと部屋を見て。

「同じだな」

すると、縁が目の前にある枕を持ち。

「当たり前じやん、バーカ」

枕を投げると、茂信の腹部に当たり。

「いてえなーあ

枕を拾い、縁に投げ返したのを見て亜紗美が。

「男子と女子でドッジしようよ~」

「いいぜ」

布団をたたみ、麗子が枕を男子に投げると光孝がキャツチして、

縁に向かつて投げると。

「キヤツ！」

見事に中つて外野に回ると、和美が落ちている枕を拾い俊宏に投げ中て俊宏がガイヤに回り、浩一が拾い亜紗美に投げると見事にキヤツチして和英に向かつて投げると和秀もキヤツチして投げようとした時、戸が開いて担任が男子たちに。

「お前ら、部屋に戻りなさい」

「はい」

低い返事をし、部屋を出て行くと女子たちに。

「早く寝なさい」

「はい」

返事をし、担任が出て行くと麗子が。

「ねえ、お菓子食べよっ？」

「うん」

バッグの中から、昼間買ったお菓子を出して布団に入り、しゃべりながら食べて。

「そろそろ、寝よっ？」

「そうだね、おやすみ」

麗子が部屋の電気を消して、眠りに就いた。

次の日。

「お世話になりましたーあ」

頭を下げ、バスに乗り込むと第2の見学場所に向かい走り出し数分後、自然公園に着いてバスから降りて見学していると、生徒たちの前に公園で放し飼いに買われているクジャクや鹿が現れて生徒たちは喜んでいると、生徒指導の教師が。

「では、お昼にします、各班の班長さんはお弁当を取りに来てください」

各班の班長が担任の所に行き、旅館で作つてもうつたお弁当をも

らい各班に持ち帰り食べていると、鹿たちが寄つて来て生徒たちはお弁当のおかずを投げ『えたりしていて、亜紗美たちの所にも鹿たちが寄つて来て。

「はーい、お食べ

おかずを投げると、食べ始めその姿を見ながり。

「かわいい　い」

お弁当を食べて、食休みをしていると。

「では、行きますよ　お」

声が聞こえると、各クラスに集合してバスに乗り　学校に向かつて走り出した数時間後、学校に着きバスから降りて。

「ありがとうございましたー　あ

頭を下げ、バスが校庭から出て行くと軽い連絡を受けて、その場で解散になり。

「常磐さん、帰らつよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き亜紗美の家の前で。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入リリビングに行き母親に。

「ただいまーあ

「おかげり、どうだつた旅行は？」

「結構、楽しかつたよ」

荷物を洗面所に置き、部屋で雑誌を見ていると『』を音がして。

「何？」

「これから、買い物に行くんだけと、何が食べたい？」

「うーとね、ハンバーグが良い

「わかつた、買つて来るね」

母親が出て行き、雑誌の続きを観ていると電話がなり、雑誌を伏せて電話に出た。

「はい、常磐です」

電話は、単身赴任中の父親だった。

「お父さん元気、私もお母さんも元気だよ、うん、わかつたよ、言つておくな」

電話を切ると、母親が帰つて来て。

「お父さん、明日、帰つて来るつて

「そう」

夕食の用意を始めた。

？帰つて來た父親

今日は、3ヶ月ぶりに父親が帰つてくれる日。

「いつてきま　す」

家を出て、学校に向かい歩き校門の所で、麗子に逢い。

「おはよづ、亜紗美」

「おはよう、麗ちゃん」

「何か、いい事でもあつたの？」

「うん、今日ね、お父さんが帰つて来るの」

嬉しそうに話すと。

「亜紗美、お父さん好きだから、よかつたね」

「うん」

教室に行き、授業を受けた。

放課後。

「常盤さん、帰らうよ？」

「うん」

「常盤さん」

「うん、何？」

「CD、買ひに付き合つてよ」

「うん、いいよ、待つてて」

中に入り、部屋に行き財布を持つて家を出て、自転車を転がしながら光孝の家に向かつた。

数分後、光孝は立ち止まり。

「ここが、僕ん家だよ」

家が建つてゐる場所は数年前まで、空き地で麗子たちと遅くまで遊んだ場所だった。

「いじつて

「どうかしたの？」

「昔、麗子ちゃんたちと、よくこの場所で遊んだんだーあ

思い出を話した。

「へ～え、そなんだ、ちょっと待つてて」

中に入つて数分後。出て来て自転車に乗り。

「行こ～?」

「うん」

CDショップに向かつた。

CDショップに着き、自転車を降り店内に入りCDアルバムを持つて、レジで支払いをし店を出て来た道を戻り光孝の家の前で。

「一緒に、聴こ～? よ?」

「うん」

上がり、部屋でCDを聴いて数十分後。

「そろそろ、帰るよ」

「じゃあ、送るよ」

家を出て、自転車を転がし亜紗美の家の前で。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入ると玄関に見慣れた靴が脱いであり、急いでリビングに行くと3ヶ月ぶりに見る父親がいて。

「お父さん、おかえり」

「ただいま、亜紗美もおかえり」

笑みを浮べ言つと。

「た・ただいま」

言つていると、母親が。

「亜紗美、夕飯、何食べたい?」

すると、父親が。

「久々に、外で食べようか?」

「うん、行こう、行こう
その夜は、外で食事をした。

? ホワイトクリスマス

冬休みになつて数日が過ぎ、今日はクリスマス。

お昼近くに起きて、洗面所で顔を洗いキッチンに行き母親に。

「おはよー」

「おはようじやないわよ、もうお昼よ」

「だつて、テレビが面白かったんだもん、それよつじ飯

「はい、はい」

キッチンで、料理を作りテーブルに置くと。

「いただきまーす」

食べていると、電話がなり母親が出て。

「ちよつと、待つてね」

受話器を置き、亜紗美の所に来て。

「麗ちゃんから、電話よ」

「ふあ　い」

口の中の食べ物を飲み込でから、電話に出た。

「もしもし、何？」

電話は、クリスマス会で呼ぶ人を決めよつよ？

「今から、行くね」

電話を切り、部屋で着替えをして家を出て、自転車に乗り麗子の家に向かつた。

家に着き、自転車を降りてドアチャイムを押すと、麗子が顔を出
し。

「こりしゃい、じつぞ」

「おじやまします」

上がり、部屋に入ると。

「それで、誰を呼ぼうか？」

「えとね、香織ちゃんと和美ちゃんと縁ちゃんとで、いいよ決めると。

「男子はどうするの？」亜紗美は時田くんと来るんでしょ」「うん、じゃあ、和英と茂信と浩一と俊宏にしょ」「それぞれの家に電話をすると。

「私、帰るね」

「うん、バイバイ」

麗子の家を出て、自転車に乗り光孝の家に向かつた。

光孝の家に着き、自転車を降りドアチャイムを押すと、光孝が出て。

「やあ、常磐さん、何？」

「夜、麗子ちゃん家でクリスマス会を遣るんだけど、来れる？」

「うん、大丈夫だよ」

「じゃあ、7時に家に来てよ」

「うん、わかった」

別れ、家に帰つて中に入りキッチンに行き、母親に。

「ただいま あ」

「おかえり」

「夜、麗子ちゃん家に行くから、『飯

「はい、はい」

料理を作り、テーブルに置くと食べ始め全部食べて。

「うちそうさま」

光孝を待つていると。

ピンポン。

ドアチャイムが聞こえ、玄関に行きドアを開けると光孝が立つていて。

「おまちどう」

「行こう」

外に出て、自転車に乗り麗子の家に向かつた。

家の前には6台の自転車が停まつていて、自転車を降りてドアチャイムを押すと、麗子が顔を出し。

「いらっしゃい、どうぞ」

「おじゃまします」

上がり、客間に行くと階いで。

「じゃあ、始めようか？ グラス持つて」
田の前に置いてあるグラスを持つて。

「かんぱーい」

グラスを軽く重ねクリスマス会は始まり、にぎやかに遅り数時間が過ぎ、女子たちは立ち上がり。

「私たち、帰るね、じゃあ」

「じゃあ、俺たちも」

帰つて行き数分後、亜紗美は立ち上がり。

「麗ちゃん、私たちも帰るね」

「うん、バイバイ」

麗子の家を出て、自転車を転がし帰り道を歩いていると、田の前に白い物が。

「うわ あ、雪だ、ホワイトクリスマスだ あ
空を見上げ、はしゃいでいる。

「常磐さん」

「うん、何？」

光孝の方を見ると、ポケットから小箱を出し。

「これ、クリスマスプレゼント」

「あ・ありがとう」

受け取り歩き、亜紗美の家の前で。

「じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入つて部屋にプレゼントを置き下着を持ってバスルームに行き、シャワーを浴びて部屋に戻りプレゼントを開けると、中

には光孝がランドセルに付けているのと同じキー ホルダーが入つていて、ランドセルに付けてベッドに入った。

? お正月

日は経ち、新しい年を迎えた。

亜紗美は部屋を出て、リビングに行くと父親がお酒を飲みながらテレビを見ていて。

「明けまして。おめでとう」

「おめでとう」

新年の挨拶を交わし、おせち料理を食べていると、父親がポケットからお年玉袋を出し。

「はい、お年玉」

「ありがとうございます」

受け取り、おせちを食べ部屋に行きお年玉袋を開けると、中に5千円札が入っていて貯金箱に入れて雑誌を見ていると。

ピンポーン。

ドアチャイムが聞こえ、玄関に行きドアを開けると麗子と香織と和美と縁が立つていて。

「おめでとう、皆」

「おめでとう」

新年の挨拶を交わすと。

「ねえ、初詣に行こうよ?」

「うん、いいよ、待つて」

ドアを締め、リビングに行き両親に。

「初詣に出に行つてくるね」

家を出て、自転車に乗つて近くの神社に向かつた。

神社に着き、自転車を降りて境内に行くと大勢の人々が参拝に来ていて、5人も賽銭箱に向かつて歩いていると、光孝に逢つた。

「やあ、常盤さん」

「おめでとう、時田くんはもうお参りしたの？」

「うん、じゃあ」

「うん、バイバイ」

別れ、歩きながら。

(時田くん、どんなお願いしたんだろう?)

賽千箱にお金を投げ入れ、それのお願いをした。

(ずっと、時田くんといられますように)

心の中でお願いをし、神社を後に自転車に乗り。

「じゃあね」

「バイバイ」

別れ、家に帰ると家の前に見慣れた車が停まつていて中に入り、客間に行くと父と父の弟夫婦が来ていた。

「叔父さん、叔母さん、明けまして、おめでとうございます」

新年の挨拶をすると。

「おめでとう、亜紗美ちゃん、そうだ」

「おこ、お年玉」

奥さんに言ひと、バックの中からお年玉袋を出し。

「はい、お年玉」

「あ・ありがとうございます」

礼を言ひ、受け取り部屋に行きお年玉袋を開けると、中に一万五千円札が入つていて貯金箱に入れた。

三が日が過ぎ。

宿題の書初めをして、洗面所で習字道具を洗つていると電話がなり母親が出て。

「ちよつと、待つてね」

受話器を横に置き。

「麗子ちゃんから、電話あります」

「はい」

水を止め、電話に出た。

「もしもし、何？」

電話は、「ゲームを買い付け合いで」と詮づ内容で。

「いいよ、今から行くね」

電話を切り、道具を片付けて財布を持って家を出て、自転車に乗つて麗子の家に向かつた。

家の前に行くと、麗子が待つていて。

「おまちどう」

「行こう?」

「うん」

ゲームショップに向かつた。

ゲームショップに着き、自転車を降りて店内に入ると大勢の人があり物をしていて、麗子は5日前に発売されたゲームを持ってレジで支払いをして店を時、光孝と見知らぬ女の子に逢つた。

「やあ、常磐さんに石橋さん」

「時田くん、その子、誰?」

麗子が聞くと。

「紹介するよ、従姉妹の時田歩美って言つんだ、歩美、挨拶しなさい」

「ほんにちは、時田歩美です」

頭を下げる。

「こ・こんにちは」

2人は軽い会釈をすると、光孝は麗子の持つている袋を見て。「何の、ゲームを買ったの?」
聞かれ、袋から出して。

「これえ」

見せると。

「そのゲームは、攻略本を見て遣つた方がいいよ」

「 セウの、じゃあ、買ってみるよ、ありがとう、行こう。」

「 うん、じゃあ」

光孝と別れ、本屋に向かつた。

本屋に着き、自転車を降りて店内に入り攻略本を持つてレジで支払いをして店を出て、来た道を戻り麗子の家の前で。

「 ゲーム、しよう?」

「 うん」

中に入り、部屋に行きゲームを楽しみ1時間が経ち。

「 私、帰るよ」

「 うん、バイバイ」

麗子の家を出て、家に帰つた。

？ 父の入院

3学期が始まり、数日が経つた。

「いってきます」

家を出て、学校に向かつて歩き校門を潜り校庭を歩いていると、隣に光孝が来て。

「おはよう、常磐さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、教室に行き授業を受けていると、教室の口が開き生徒指導の教師が担任に耳打ちをすると。

「常磐さん、ちょっと」

呼ばれ、教師と廊下に出ると。

「今、お家の方から電話があつてお父さんが事故で病院に運ばれたらしい」

「えっ！ お父さんが」

驚きを隠せないでいると、教師はポケットから病院の名前が書いてある紙を出し。

「早く、行つてやれ」

「はい」

紙を受け取り、学校を出て病院に向かつた。

近くの市民病院に着き、受付で父親の名前を言い病室を聞いてエレベーターでその階に行き、父親のいる病室の口を叩くと。

「はい、どうぞ」

母親の声がし、病室に入ると頭と腕に包帯を巻いた父親が寝ていて。

「お父さん」

父親に近づいたとした時、母親が小さな声で。

「今、酔で寝た所だから」

「それで、お父さん、大丈夫なの？」

「大丈夫よ、骨折だけだから」

「じゃあ、学校に戻るね」

病室から出ようとした時。

「お母さん、お父さんが気がつくまでいなくっちゃなんないから」

「わかった、じゃあ」

病院から出て、学校に戻り残りの授業を受けた。

放課後。

「常磐さん、帰らうよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き畠紗美の家の前で。

「常磐さん」

「うん、何？」

「夜、食べに行こうよ？」

「うん、いいよ」

「じゃあ、6時に迎えに来るよ」

「うん、わかった、待ってるよ」

別れ、中に入りリビングに行き。

「ただ、そうだ、病院だつけ」

部屋に行き、宿題をした。

そして、6時になり。

ピンポン

ドアチャイムが聞こえ、玄関に行きドアを開けると光孝が立つていて。

「お待ちかどり、行こうか？」

「うん」

家に出て、自転車に乗つてファミレスに向かった。

ファミレス着き、自転車に降りて店内に入ると夕食時なので大勢の人が食事をしていて、2人がキヨロキヨロしていると田の前にウエイトレスが来て。

「いらっしゃいませ、何名様ですか？」

「2人です」

答えると、空いている席に案内してくれ座ると。

「お決まりになりましたら、お呼び下さい」

去つて行くと、メニューを広げ選び始め数分後。

「決ました?」

「うん」

テーブルの隅に置いてあるブザーを押すと、ウエイトレスが来て。「お決まりになりましたか?」

オーダーを取る準備をすると。

「常磐さんから、どうぞ」

「じゃあ、私はスペゲティのマートソースとレモンスカッシュで」

「僕は、サイコロステーキセツトのご飯とコーラで」

オーダーを取ると、

「少々、お待ち下さい」

一礼して去つて行き数十分後、料理が運ばれて来て目の前に置かれ。

「以上で、ご注文はよろしいでしょうか?」

「はい」

「ごゆっくり、どうぞ」

一礼をして去つて行き。

「いただきます」

食べ始め、全部食べ食休みをして。

「出ようか?」

「うん」

レジで支払いをして店を出て、自転車に乗り畠山美の家の前で。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入ろうとした時、母が帰つて来て。

「どこかに、行つて来たの？」

「時田くんとご飯を食べに、それよりお父さんは？」

「大丈夫、ご飯食べられたから」

「よかったです」

中に入り、下着を持ってバスルームに向かつた。

? 手作りチョコ

2月に入り、明日は男の子に思いを伝えるバレンタインマー。

「いつきます」

家を出て、学校に向かつて歩き校門の前で、光孝に逢い。

「おはよう、常磐さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、教室に行き授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると、麗子が来て。

「亜紗美、帰る?」「

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き麗子の家の前で。

「ねえ、チョコ買いに行こうよ?」

「うん、いいよ、じゃあ」

別れ、家に帰り中に入りリビングに行き母親に。

「ただいま」

「おかえり」

部屋に行き、ランドセルを置き財布を持つて家を出て、自転車に

乗り麗子の家に向かつた。

家の前で、麗子が待つていて。

「お待ちどう」

「行こ?」「

「うん」

スーパーに向かつた。

スーパーに着き、自転車を降り店内に入りチヨコが置いてある場所に行くと、大勢の女の子たちがチヨコを選んでいて、麗子は2つのチヨコを持ち。

「亜紗美は、買わないの？」

「うん、今年は作ろうかなって思つ」

お菓子売り場で、板チャコ2枚と「初めてのチヨコ作り」と書つチヨコ作りの道具が入った箱を買い物籠に入れレジで支払いをして店を出て、来た道を戻り麗子の家の前で。

「ゲーム、しようよ？」

「うん」

中に入り、部屋でゲームをしていると。

「ねえ、麗ちゃん」

「何？」

「」の前、時田くんに言われて攻略本を買ったゲーム、進んだ？

「うん、大分、見たい？」

「うん」

頷くと、ゲーム機の中からCDを出してこの前買ったCDを入れ電源を入れると、画面にタイトルが出て冒険の続きの選択ボタンを押すと、画面が変わりキャラクターを操作していると画面が黒くなり強そうな敵キャラが出て来て。

「何か、強そう」

「こんなのは、今の私の敵じゃないわよ」

戦う、のコマンドを押して戦い始め、敵に切りつけると敵キャラの下に4桁の小さい数字が出て。

「何、この数字？」

「敵に与えたダメージだよ」

言つていると、敵は消えてしまい麗子のキャラが勝つた。

「凄い、麗ちゃん」

「でも、ここまでにするのに結構難しかつたよ」

「ふうん、そんなに難しいんだ、ゲーム？」

「うん、昔、従兄弟とこのゲームをやつてた時なんて全然わかんな
くて、すぐにゲームオーバーになっちゃったんだ。でも時田くん
に教えてもらつた本を見てやつてているから、ちょっとずつ理解して
進めるようになったんだーあ」

「そりなんだ、時田くんつてゲームの先生みたいだねえ？」

「そうだね」

2人でクスクスと笑い、違うゲームを遣り。

「私、帰るね」

「うん、バイバイ」

麗子の家を出て、家に帰り中に入りキッチンに行き。

「ただいま あ」

「おかえり」

「ご飯、食べたらキッチン使つていい？」

「いいけど、ちゃんと後片付けしてよ」

「うん」

夕飯を食べて、後片付けを手伝い母親がテレビを見始める、ス
ーパーの袋を持つてキッチンに行き袋の中からチョコを出しボウル
の中で砕き、鍋にお湯を入れ火にかけて沸騰するとボウルを浸ける
と、チョコはみるみる溶けて原形を無くすと「チョコ作り」の箱を
開けハート形の型を出してお皿に並べチョコを流し込みヘラで平ら
にして冷凍庫に入れ、部屋で包装紙を選んだが気に入つたのが無く。
「買いに行こう?」

財布を持って家を出て、自転車に乗り文房具店に向かった。

文房具店に着き、自転車を降りて店内に入り包装紙が置いてある
場所に行き、選び始め数秒後。

「これにしよう」と

選んだのは、小さなハートが散りばめられた包装紙を持ちレジで
支払いをして店を出て、来た道を戻り家に入り冷凍庫を開けチョコ
を取り出すと、見事に凍つっていて。

「やつた あ、出来る」

型から一つ一つ抜き箱に入れ、包装紙で包んでリボンをして。

「これで、よしつと」

冷蔵庫に入れ、部屋に行き下着を持つてバスルームに向かった。

次の日。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門を潜り校庭を歩いていると、隣に麗子が来て。

「おはよう、亜紗美」

「おはよう、麗ちゃん」

挨拶を交わし、校庭を歩きながら。

「チヨコ、出来た?」

「うん」

笑みを浮べ頷き、教室に行き授業を受けた。

放課後。

ランドセルの中に授業道具を入れていると、光孝の所に桜井知恵と角田妙子が来て顔を赤くしチヨコを差し出し。

「こ・これ食べて」

「あ・ありがとう」

受け取ると、2人は去つて行き。

「常磐さん、帰ろつよ?」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き亜紗美の家の前で。

「ちょっと、待つて」

中に入り、冷蔵庫からチヨコを出して家を出て、顔を赤くしチヨコを差し出し。

「これ、作ったの」

「あ・ありがと」
受け取り。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入り部屋で宿題をした。

? 初めてのキス

3月に入り、小学校最後の月になつた。

「いつてきます」

家を出て、学校に向かい歩き校門の所で、光孝に逢い。

「おはよう、常磐さん」

「おはよう、時田くん」

挨拶を交わし、教室に向かつた。

そして、3時間目のチャイムがなり、担任が原稿用紙の束を持って入つて来て教壇に置くと。

「え」と、今日の3・4時間目は作文2枚書いてもらいます

「え　え」

声が上がつたが、用紙を配り始め全員に行き渡ると。

「6年生になつてからと言つ題で、書いて下さい」

生徒たちは作文を書き始め、亜紗美は光孝との出会いや色々な思い出を書いていると、3時間目の終了のチャイムがなり教室を出で行く生徒たちがいたが、亜紗美は書き続けていると麗子が来て。

「ねえ、書けてる?」

「うん、2枚目に行つたとい、麗ちゃんは?」

「まだ、半分も書いてないよ」

話していると、チャイムがなつて席を離れていた生徒たちは座り続きを書き始め、書きあがつた生徒は担任に出して次の授業の予習を始め、亜紗美も出し予習をしているとチャイムがなり。

「書けなかつた人は宿題にします、じゃあ、給食にしましょ」

給食係りが給食の用意をして、食べて昼休みをして5時間目の授業を受けた。

放課後。

「常磐さん、帰りますよ？」

「うん」

学校を出て、帰り道を歩き亜紗美の家の前で。

「じゃあ、明日」

「うん、バイバイ」

別れ、中に入つてリビング行くと腕に包帯を巻いただけの父親が座つていて。

「亜紗美、おかえり」

「ただいま、お父さんもおかえり」

「ただいま」

部屋に行こうとした時。

「亜紗美」

「うん、何？」

「宿題は、どの位で終わるんだ？」

「今日は、そんなに出てないから1時間かな、何で？」

「さつき、会社に電話したら社長が出て、快気パーティをして下さるそりなんで、後2時間後にいくから、聞いたんだ？」

「ふ～ん、じゃあ、していくるね」

部屋で宿題を始め、終わるとリビングに行き。

「終わったよ」

「じゃあ、行こうか？」

FAXで送られてきた地図を持つて、家を出で。

「社長の家は、近そりだから歩いていくぞ」

歩き始め、歩きながら。

「ここも、しばらく見ないしね変わったなーあ

回りを見ながら歩き、数分歩き父親が立ち止まると亜紗美は驚いた、なんと社長の家は光孝の家だった。

(えっ！ お父さんの会社の社長って時田くんのお父さん？)

父親がドアチャイムを押し、ドアを開け。

「こんばんは、常磐です」

すると、奥から女人の人が出で來た。

(「の人が、時田くんのお母さん、きれーえ）

「お待ちしてました、じうざ」

「おじやまします」

上がり、奥さんと客間に行くとテーブルの上には沢山の料理が出ていて、そこに中太りの男の人が座つていて。

「これは、これは、常磐さん」

「し・社長、お呼びいただきありがと「うざこます」

頭を下げる。

「固い事は抜きで、じうざ」

席を勧められると。

「し・失礼します」

座り、料理を食べていると背後で。

「こ・こんばんは」

光孝の声がし、亜紗美は振り向き。

「こんばんは、時田くん」

「あっ！ 常磐さん」

驚いていると、光孝の父親が。

「光孝、知つているのか？」

「うん、同じクラスなんだあ」

答えると、目を真ん丸くして。

「家の息子と、社員の娘さんが同じクラスだと、これは驚いた、なあ常磐さん」

「はあ」

2人の父親は、ビールを飲んでいると。

「常磐さん、部屋に行こうよ？」

「うん」

2階の光孝の部屋に入ると、色々な家電と沢山のマンガ本が入っている本棚があつて。

「好きな所に、座つて」

「うん」

その場に座ると。

「音楽でも、聴く?」

「うん」

リモコンの再生ボタンを押すと、スピーカーから歌が流れて来た、
その歌は亜紗美が好きなアーティストの歌で。

「時田くん、このアーティスト好きなの?」

「うん、常磐さんも」

「うん、いいよね　え」

「うん」

歌を聴いていると、脳裏に昨日読んだ（キスはレモンのような味・

・・）雑誌のフレーズかよぎり、顔を赤くして。

「時田くん、キスつてレモンみたいな味がすんだって、してみよう
か?」

「えつ！　う、うん」

光孝も顔を赤くし頷き、亜紗美が目をつぶると肩に手を置き唇を

重ね数秒後、唇を離し。

「味、しないねえ？」

「うん」

話していると、口を呑く音がし。

「はー、どうだ」

戸が開き、亜紗美の母親が。

「亜紗美、お母さん帰るけど、どうする?」

「まだ、いる」

「あまり、遅くならないでね」

「うん、わかつたよ」

母親が帰つて行くと。

「ジュース、持つて来るから本でも見てて」

部屋を出て行き、本棚からマンガ本を2・3冊出し見ていふと、

光孝が戻つて来てグラスにジュースを注ぎ。 「どうぞ」

「ありがとう」

一口飲み見ていると、光孝もマンガ本を見始めて数時間後、亜紗美は本を片付け。

「私、帰るよ」

「じゃあ、送るよ」

家を出て、夜道を歩き亜紗美の家の前で。

「おやすみ」

「うん、おやすみ」

別れ、中に入つて下着を持ってバスルームに向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0110z/>

ずっと、このままでよ

2011年12月20日23時45分発行